シリーズ　私の一冊の本

環境科学研究所　　伊吹 裕子　先生

川島 慶子著『 マリー・キュリーの挑戦
－科学・ジェンダー・戦争－』

閲覧室1階　289.3/C96　　㈱トランスビュー　出版

「女性科学者」といって、誰もがまず一番にその名を挙げるのが、マリー・スクォドフスカ・キュリー、通称キュリー夫人であろう。マリー・キュリーは、放射性物質を発見してノーベル賞をとった「偉大な科学者」、そして夫ピエール・キュリー亡き後、二人の子供を育てた「良妻賢母」として、その伝記で伝えられている。妻・母・科学者として素晴らしい女性であったことは事実であるが、本書はこれまでに描かれてこなかったマリー・キュリー、一人の女性の生き方に注目する。また、マリー・キュリーに関わった人たちの生き方にも触れる。

ポーランド人であるマリーは、ピエールとの結婚によりフランスに帰化する。「彼女がその生涯で、男性に対して一歩も引かなかったのは、自分が女性である以前にポーランド人であるという事情が抜きがたく存在していた」と著者は記す。我々人間は、自分の出生や育つ環境を自ら選ぶことはできない。与えられた環境が自身の生き方に大きく影響し、束縛するものとなることもあるが、本書は、それに屈することなく、逆にそれをばねとして自分の信念を貫き、歩みを進めていくことが重要であることを、マリー・キュリーの生き方を通して指し示す。また、マリー・キュリーがおよそ百年前に生きた女性研究者であることを忘れてしまうくらいに、本書の内容は現代社会の問題を解決する手がかりを与えてくれる。科学者に国籍は関係あるのか、社会の中での女性の役割とは、女性が仕事と育児を両立するのには、そして科学者のあるべき姿とは・・。理系文系を問わず、これから研究を始める学生諸氏に是非読んで欲しい一冊である。